

日英語の伝聞表現をめぐって

伊 藤 晃

1. はじめに

情報を分類する仕方には様々なものがある。代表的なものとしては、「新情報」「未知情報」「旧情報」「既知情報」といったものがある。「旧情報」あるいは「既知情報」とは、発話に先立って、話し手が聞き手の意識の中に存在するであろうと想定しうる情報であり、「新情報」あるいは「未知情報」とは、発話に先立って、話し手が聞き手の意識の中に存在しないであろうと想定しうる情報である。

情報を分類する際には、話し手が当該の情報をどのようにして獲得したかを問題にすることも出来る。すなわち、話し手が直接見聞きして得た情報と話し手が間接的に得た情報を区別することが出来る。前者は、通常⁽¹⁾のようにモダリティを伴わない直接形を用いて表されるのに対して、後者は、⁽²⁾のように伝聞のモダリティを伴って表現される。

(1) 太郎は花子と結婚する。

(2) 太郎は花子と結婚するそうだ。

日本語の伝聞表現が「そうだ」「という」といった文末形式を取るのに対して、英語の伝聞表現は、“I hear that～”“They say that～”“It is said that～”といった複文構造を取る場合が多いように思われる。

(3) I hear that John will get married with Mary.

(4) They say that John will get married with Mary.

(5) It is said that John will get married with Mary.

小論では、日本語と英語の伝聞表現を考察の対象とし、構文レベルおよび談話レベルでの比較・対照を行う。

2 . 感嘆表現との共起関係

本節では、日本語と英語の伝聞表現が感嘆表現と共起しうるかどうかを考察する。まず、日本語の感嘆表現について簡単に見ておこう。

(6) 太郎は上手に英語を話す。

(7) 太郎はとても上手に英語を話す。

(8)*太郎は何と上手に英語を話す。

(9) 太郎は何と上手に英語を話すのだろう。

感嘆表現「何と」は、強意副詞「とても」とは異なり、モダリティ表現を要求することが分かる。さらに以下の例を見られたい。

(10) 太郎は速く泳ぐ。

(11) 太郎はとても速く泳ぐ。

(12)*太郎は何と速く泳ぐ。

(13) 太郎は何と速く泳ぐのだろう。

(14) 太郎は何と速く泳ぐそうだ。

(15) 何と太郎は速く泳ぐそうだ。

(14)(15)から明らかなように、伝聞を表す「そうだ」は、感嘆表現「何と」と共起可能である。

次に、英語において伝聞表現と感嘆表現が共起しうるか否かを見てみると、日本語の対応表現とは異なり、両表現が共起することは不可能である。以下に日本語の例と共に英語の例をあげる。

- (16) 太郎は優秀な学生だ。
(17) John is a good student.
(18) 太郎はとても優秀な学生だ。
(19) John is a very good student.
(20) 太郎は何と優秀な学生だろう。
(21) What a good student John is!
(22) 太郎は何と優秀な学生だそうだ。
(23) 何と太郎は優秀な学生だそうだ。
(24) *I hear what a good student John is. (cf. I hear that John is a good student.)
(25) *They say what a good student John is. (cf. They say that John is a good student.)
(26) *It is said what a good student John is. (cf. It is said that John is a good student.)

(24) (26)から明らかなように、“I hear”“they say”“It is said”といった表現は、that節とは共起しうるが感嘆文とともに用いられることはない。

以下の例についても同様の議論があてはまる。

- (27) 太郎は速く走る。
(28) John runs fast.
(29) 太郎はとても速く走る。
(30) John runs very fast.
(31) 太郎は何と速く走るのだろう。
(32) How fast John runs!
(33) 太郎は何と速く走るそうだ。
(34) 何と太郎は速く走るそうだ。
(35) *I hear how fast John runs. (cf. I hear that John runs fast.)

(36) *They say how fast John runs. (cf. They say that John runs fast.)

(37) *It is said how fast John runs. (cf. It is said that John runs fast.)

英語では、伝聞を表すと思われる “I hear”, “they say”, “it is said” といった表現形式は感嘆表現と共起しない。これは、感嘆文が話者の主観を含み、名詞化ないし従属節化が出来ないためであると考えられる。

以下に感嘆表現と伝聞表現が共起した日本語の実例をいくつかあげておく。(下線部は筆者による。#は談話の冒頭であることを表す。)

(38) いろりを囲むように、土間一面にかます(ワラムシロの袋)が敷いてある。なんと、家族が一人一人このなかにもぐりこんで眠った、という。あばら家のなかの「直土に藁解き敷きて」寒さに耐えた、と山上憶良が詠んだ万葉時代と、これは変わらない。

(毎日新聞 11月10日1997年)

(39) この猫が、話を聞くだけでも私などには身の毛がよだつ化け猫なのだ。なんと、その猫、涙を流してよよと泣くという。

(森瑤子 『別れの予感』)

(40) 厚木飛行場から横浜へ向かうマッカーサー一行の車列の先頭はなんと真っ赤な消防自動車だったという。日本側がよせ集めた木炭車をふくむ乗用車、トラック数十台は、日本軍兵士が道に背を向けて警戒する中、人けのない街道を進んだ。(毎日新聞 8月30日2005年)

(41) さて今「太陽が昇るところや沈むところを見たことがない」という子供がなんと42%にのぼったという。生活家庭面の企画「子育て応援」で紹介されていた関西の小学生の調査である。

(毎日新聞 4月23日2004年)

(42) 斜面のこう配が15度以上で、土石流が発生した場合、影響を受ける民家が5戸以上あるところを建設省は「土石流危険渓流」と呼んでいる。その「土石流危険渓流」は、何と全国で7万9318ヵ所あるそうだ。

- 全国どこに行っても危険地帯だらけ。8万匹のヘビがとぐろを巻いている。
(毎日新聞 7月11日1997年)
- (43) プロ野球のイチロー選手がメジャー挑戦、という話題で日本中が沸いている。なんと野手では、初めての挑戦だそうだ。同じ日本人として、ぜひ彼には世界の舞台で大活躍してほしい。
(毎日新聞 12月23日2000年)
- (44) 米国では自主的な販売中止を指示しており、販売禁止に向けた手続きをしているというのに、なんと日本の厚生省は、「当面回収などの指示をする考えはない」そうだ。
(毎日新聞 11月15日2000年)
- (45) #神様が世界をつくったとき、なんとうっかりしてブルガリアに土地をあてがうのを忘れてしまったそうだ。神様は、そこで仕方なく天国の一部をブルガリアに分け与えた。こんな言い伝えがある。
(毎日新聞 12月1日2005年)
- (46) 2～3月危機に襲われると心配された日本すら、何と2～3月に底入れしたようだ。その要因は輸出急増に尽きるのだから、落第生日本すら米国中心の景気回復の波に乗らんばかりの気配がする。
(毎日新聞 6月7日2002年)
- (47) バグダッド郊外のアブグレイブ刑務所と言え、旧フセイン体制下で多数の政治犯などが虐待、拷問、処刑された恐怖の施設で知られる。こともあろうに、その施設内で収容者や拘束者たちが集団虐待を受けていたという。
(毎日新聞 5月7日2004年)

以上、本節では、日英語の伝聞表現と感嘆表現との共起関係を見た。他から伝え聞いた情報を驚きの気持ちを持って伝えるといったことは、日本語においても英語においてもありうることであり得ると思われる。しかしながら、日本語においては、伝聞表現が感嘆表現と共起可能であるのに対して、英語では不可能である。

3 . 談話における機能

本節では、伝聞表現が談話において果たす役割について考察を進める。日本語の伝聞表現を観察すると、次例のように、同表現が談話の冒頭に現れうる事が分かる。(#は談話の冒頭であることを示す。)

- (48) # 懲戒免職になった米デンバー前総領事はパーティー参加者から「閣下」「閣下殿」と奉られていたという。館員にも自分を「閣下」と呼ばせていたそうだ。前総領事は週に1～2回、日系人を招いて小規模なパーティーを開いて懇談していたというから積極的な人だったに違いない。それにしても「閣下殿」とは！盛り場でサラリーマンが「社長」と声をかけられて、仕方がない、一杯やるか、とでれでれになるあのメカニズム。 (毎日新聞 7月28日2001年)

類例を以下にいくつかあげる。

- (49) # 「幸運が重なった」と興奮気味に語ったという。世界一周を果たしたあと、サハリン沖で消息を絶ち、漂流しているところを無事救助された幸運な4人。4人の乗った「ピラタスPC12」は飛行中、エンジンが突然停止し、海上に不時着した。折から無風状態で、着水時の衝撃がなかったこと、救命ボートに保温着と非常食があったこと、未明だったために発射した信号弾で相手の貨物船がすぐに応じたこと・・・幸運の連鎖だ。 (毎日新聞 7月10日2001年)
- (50) # 薬害エイズ事件の松村明仁被告は東京地裁で検察側から禁固3年を求刑された瞬間、無表情で3年と書き込み、丸で困んだという。無意識に役所の癖が出たのだろう。この元厚生省生物製剤課長は公判で「わが国では血友病患者の中でクリオ製剤の使用者が少なく」「わが国の血液事業もやっと近代化され」「わが国においては外国由来の血漿に頼ることをやめ」などと「わが国」を連発していた。「わが国」

というのも役人の癖だ。 (毎日新聞 12月29日2000年)

- (51) # 仙台市の北陵クリニックは、全身麻酔をするときに使う危険な「筋弛緩剤」を1階の薬局に無造作に置き、鍵をかけなかったという。職員はだれでも自由に入出りできる。事件後、半田郁子副院長は「弛緩剤が減っているような感じがあった」と語っていたが、クリニックには無防備とむとんじゃくが支配していた。薬局に施錠して、さらに薬事法に指定されている毒薬、劇薬を金庫に入れて鍵をかければ、事件は多分防げただろう。 (毎日新聞 1月12日2001年)

このような談話の冒頭部分に現れる伝聞表現が談話において果たしている機能は、談話にトピックを導入することであると思われる。次例では、談話の冒頭に現れた伝聞表現によって「情報を思い出すには覚えるよりも相当多くの時間を要すること」がトピックとして談話に導入され、後続部分に導入されたトピックに関する記述が続いていることが分かる。

- (52) # 情報を思い出す時間は覚える時間の35倍かかるという。科学技術振興事業団プロジェクトと岡崎国立共同研究機構生理学研究所などがサルを使って実験した結果だそうだ。かく言う人間も「ええ、それはですね、つまりその・・・」と冷や汗をかきながら懸命に思い出そうとすることがしょっちゅうある。せっかくのどまで出かけたのに、脳の奥にさっさと薄情に引っ込むことだってないわけではない。サル君の記憶力は大したものだ。 (毎日新聞 1月27日2001年)

さらに以下にあげる例を検討してみよう。

- (53) # ワシントンで覚えた言葉だが、米軍に「マザー・テスト」という俗語があるそうだ。国民の命を預かり、兵士を危険な任務に送る最高責任者は大統領。その資質と判断を問う試練をさす。大統領は命令書にサインするだけ。死ぬのは一線の兵士たちだ。命令とはいえど、愛する息子や娘を奪われた母親たちは嘆き、悲しみ、どん底に沈む。そ

の時、それがいかに国家のために尊い犠牲だったかを衷心から説明し、納得してもらおう。母（マザー）の許しを求める試練だから「マザー・テスト」。自ら死地に身をさらさない最高司令官の究極の使命だ。

（毎日新聞 9月24日2002年）

本例においては、談話の冒頭に現れた伝聞表現によって「マザー・テスト」が談話にトピックとして導入されており、後続する文脈にこの「マザー・テスト」に関する記述が現れていることが良く分かる。類例を以下にいくつかあげておく。

(54) # アフリカ大陸の最西端セネガルは土地の言葉で「私の舟」、中西部のカメルーンは「エビの多い川」という意味だそうだ。たゆたう舟、悠然と流れる川。セネガル代表チームの事前キャンプ地、静岡県藤枝市のW杯担当課長が自殺した。課長は「日本と感覚が違うので大変」と周囲にこぼしていたという。セネガル代表の到着が遅れたり、届くはずの民芸品が来なかったり、気をもむことが多く、気の毒に神経をすり減らしたようだ。 （毎日新聞 5月22日2002年）

(55) # 来年度から使われる高校国語教科書に作家・山田詠美さんの小説「ぼくは勉強ができない」が載ることになっていたが、検定意見がついて別の作家の作品と差し替えられたそうだ。問題になったのは、作中で小学5年生の同級生がもらした「馬鹿だから」という一言。検定で「特定の児童に対する差別的な言動についての適切な手当がなく、必要な配慮を欠いている」と指摘され、出版社は自主的に山田さんの作品を削除した。 （毎日新聞 4月11日2002年）

(56) # 英国の翻訳会社が、世界の言語学者1000人に翻訳の難しい単語は何か聞いたそうだ。その結果、1番になったのはコンゴ共和国南東部で用いられるテルーバ語の「ilunga」だった。その意味は「1度目はどんな悪口を言われても許し、2度目も我慢するが、3度目は絶対許

さない人物」だ。第2位はイディッシュ語（東欧のユダヤ系言語）の「shimazl」で「慢性的に不幸な人」である。

（毎日新聞 7月25日2004年）

- (57) # ブッシュ米大統領が演説で「自由の拡大」を呼びかけて以来、イスラエル現職閣僚のナタン・シャランスキー氏の著書が話題を呼んでいるそうだ。シャランスキー氏は旧ソ連時代のウクライナ生まれのユダヤ人。「ソ連の水爆の父」と呼ばれ、後に反体制知識人の象徴となったサハロフ博士の支援者として西側で注目されていたが、自身も「米国スパイ」の罪名でシベリアなどに9年間も収監された。86年にイスラエル移住を許されている。

（毎日新聞 2月12日2005年）

本稿では、「という」「そうだ」といった表現以外に、「ようだ」「らしい」といった表現も伝聞表現として扱う。以下に見られるように、「ようだ」「らしい」といった表現は、「という」「そうだ」といった表現と同様に、情報の出所を表す「～によると」という表現と共起しうるからである。

- (58) 新聞によると、事故で50人が死亡したという／そうだ／ようだ／らしい／*だろう／*かもしれない／*にちがいない。
- (59) 花子によると、太郎は大学に合格したという／そうだ／ようだ／らしい／*だろう／*かもしれない／*にちがいない。

以下の例では、談話の冒頭に伝聞表現「ようだ」「らしい」が現れ、これまでに見た例と同様にトピック導入機能を果たしている。

- (60) # 昔の人はヘビの脱皮を見て、生命そのものが再生し、若返るのだと考えたようだ。古代メソポタミアの「ギルガメッシュ叙事詩」には王ギルガメッシュが、永遠の生命を求める遍歴で不死の草を手に入れながら、ヘビにその草を盗まれてしまうという物語がある。沖縄の昔話にも、神がヘビを殺そうとして死水と生き水を浴びよう動物たちに命じたが、頭のいいヘビだけがみんなより先にきて不死の生き水を

浴びてしまう話がある。おかげで他の動物は死水を浴びて死を運命づけられてしまった。(毎日新聞 9月23日2003年)

- (61) # 北朝鮮の金正日総書記がおかんむりのようだ。きっかけは「米国務省きってのタカ派」と呼ばれるボルトン国務次官が先月末、ソウルで行った講演だ。「金正日は」と41回も呼び捨てで連呼し、痛烈に非難したからだそうだ。さっそく講演の全文を読んでみた。「金正日は自らの失政の結果を受け止めずに王族のような暮らしを楽しみ、数十万人を収容所に監禁している」「数百万の民は絶望的貧困の中で、泥をあさって食物を探している」「国民の生活は地獄のような悪夢だ」とは確かに手厳しい。(毎日新聞 8月18日2003年)

- (62) # アフリカ・チャド生まれのトゥーマイは生前、相当いかつい顔をしていたようだ。死んだ年齢は分からないが、男性らしい。きのうの新聞に載った彼の頭骨化石をじっくり見る。目の上の「ひさし」が怖いぐらい飛び出ている。600万年前から700万年前、人類史を100万年近くさかのぼらせる最古の人類である。トゥーマイは現地語で「生命の希望」の意味という。顔つきに似合わない愛称に思えるが、サル(類人猿)からヒト(人類)になったばかり(?)だから、いかつさは仕方ない。(毎日新聞 7月12日2002年)

- (63) # 古くから「完全なる大使」がいろいろ論じられてきたらしい。16世紀末のイタリア人の著作をもとに、矢田部厚彦氏が現代版「完全なる大使」を描いている。(「職業としての外交官」文春新書)以下、その短縮版。《英語は当然。ほかに仏・独・露・スペイン・アラビア・中国語のいずれか(できれば複数)に堪能で、国際法・公法・私法に通じ、国際経済はもとより経済・財政全般、環境、人口、老人問題、軍事戦略に関する豊富な知識と、科学技術的常識、文学・音楽・美術に関する深い教養を持つ》。(毎日新聞 7月30日2002年)

- (64) # 清少納言はかなりの碁打ちだったらしい。「あそびわざは、小弓。碁」と「枕草子」にある。囲碁は中国で生まれた。日本に伝わったのはかなり古い。奈良時代にはもうあちこちの貴族の館で碁石の音が響いていたと思われる。縦横19本(路)の線が盤上に361個の交点(目)を作る。黑白二つの石が、この目の陣取り合戦をする。黒が先番。やはり先に打つ方が有利である。公式戦ではコミというハンディが設定されている。(毎日新聞 10月17日2002年)

以下にあげる例では、情報の出所が「～によると」といった言語表現によって明示されている。

- (65) # 旧約聖書によると、はじめてワインを飲んで酔っ払い、裸になった人類はノアだそう。箱船を出てノアは農民となり、ブドウ畑をつくり、ブドウ酒を仕込んだという。大洪水のあと、箱船の着いた場所がアララテの山。トルコとアルメニア国境に接するアララト山(5165メートル)がそれらしい。ノアの子孫がアルメニア人と現地の人とは信じている。そのアララト山から約50キロ離れた首都エレバンでとんでもない事件が持ち上がった。(毎日新聞 10月29日1999年)

- (66) # 最近、粗集計の終わった国際交流基金の調査によると、1998年度に世界で日本語を学習している人の数は約200万人に上るそうだ。年次をさかのぼって累積すると、現在、世界で日本語を勉強している人々の数は少なく見積もっても500万人。正規の学校を経ないで、体験的に日本語を身につけた人々を含めると、1000万人を超える人々が日本語を話すようになってきている、と社会学者の加藤秀俊さんは推測している。(毎日新聞 6月26日1999年)

トピックには、談話全体のトピックとして設定されうるものと、談話が展開する中で他のトピックに取って代わられる一時的なトピックとでもいうべきものに分けることが可能であると思われるが、伝聞表現によって

談話の冒頭に導入されるトピックは談話全体のトピックとして機能していると思われる。以下にあげるのは、談話の冒頭部分に現れた伝聞表現によって導入された要素が談話全体のトピックであることが明示的に理解される例である。談話の冒頭部分と最後の部分を示してある。

- (67) # かたくなに我意を押し通すことを「いこじ」というが、一説には意地っ張りで頑固であることを示す「いこづる」という古語から生まれたという。それが「依怙地」とあて字をされるようになったのは、とかく我意は「依怙」 偏りを生じやすいからだろう。首相として終戦の日に21年ぶりの靖国参拝に踏み切った小泉純一郎首相は、むしろ自分を依怙地とは思っていないに違いない。むしろ別の説で「いこじ」の語源とされる「意気地」を、5年前の公約実現という形で通したつもりなのかもしれない。(中略)ほかならぬ日本国民とその子孫の運命を一身に担う首相である。一国の指導者の行動はそれがどんな善意や理想によるものであれ、判断を誤れば国民、国家を危くする。その責任をすべて潔く引き受けるのが政治家の誇りのはずだ。そこに「世界注視の私事」などあろうはずがない。依怙地も、意気地もどだい我執である。政治指導者が一瞬も目を離してはならないのは、公私を問わず自らの判断や行動が引き起こす結果であり、それにとまなう責任だ。政権末期だといってタンカで見物人を喜ばせている場合ではない。

(毎日新聞 8月16日2006年)

談話の冒頭において「いこじ」がトピックとして伝聞表現によって導入され、同要素が中略部分をはさんで、談話の最後の部分にいたってもトピックであり続けていることが分かる。このことは、特に談話の最後の部分の下線部に見て取ることが可能であると思われる。以下にあげる例についても同様の分析があてはまる。

- (68) # 「揣摩憶測」は当て推量のことだが、昔の中国には“揣摩の術”

というのがあったそうだ。人の心を読み取る術のことで、戦国時代、強国の秦に対する共同戦線「合従」策を他の6国に説いた蘇秦はこの術を使ったという。「鶏口となるも、牛後となるなかれ」は、その蘇秦が小国の韓の王に、秦への服従を思いとどまるよう説得した際に使った当時のことわざだ。王の自尊心を読み、それを操って対秦同盟への参加を決断させたわけで、これも術の成果なのだろうか。(中略) この手のM&Aが日本でも珍しくなくなるかどうかを占ううえでも注目を集める両ケースだ。株主はもちろん、従業員などのステークホルダー(利害関係者)の心中を読み、その理解を得られるのはいったい誰か。揣摩の力量が試される。 (毎日新聞 8月9日2006年)

- (69) # 「早起きは三文の得」とは、一説に早寝早起きで夜の灯火の油代が節約できたからだといわれる。実際、江戸時代の庶民にとって油代はかなりの負担だったようだ。暗くなったら寝てしまうのが手取り早い生活防衛策だった。灯油に主に使われたのは菜種油で、江戸後期の文化年間には1升(1.8リットル)400文程度の値段だったという。仮に1文30円で換算すると1万2000円だから、今から見てもとんでもない高値である。貧しい庶民は、安値だがニオイのきついイワシの油をがまんして使ったそうだ。(中略) ガソリンの小売価格が最高値を更新したとのニュースが人々のまゆをひそめさせる夏だ。将来を期待されるバイオ燃料もいいことばかりでもない。ここは油代の高値を、省エネのライフスタイルでのいざご先祖の知恵に学びたい。

(毎日新聞 8月10日2006年)

- (70) # 「こころ」は「凝る」という言葉から生まれたとの説が有力だという。「広辞苑」には「禽獣などの臓腑のすがたを見て、コル(凝)またはココルといったのが語源か。転じて、人間の内臓の通称となり、更に精神の意味に進んだ」という説明が最初に書かれている。なるほ

ど心は、ややもすれば凝り固まりがちだ。いつものやかに、伸びやかな気持ちで生きたいとは誰もが願う。しかし人の世の幾重にも重なるしがらみの中で、人の心はやがて自由を失い、時には動きがとれないまでに固まってしまう。(中略)問われているのは、学校の考える「いじめ」の定義ではない。なぜ少女の生きるはずの未来が失われたのか、なぜそれを救えなかったのか である。この間の各地のいじめ問題での学校や教育委員会の有り様を見れば、「いじめ」を認めようとしなない心の凝り固まりが、子供をいっそう追い詰めてはいないかと心配になる。いじめにあっている少年少女にはもう一度呼びかけたい。いじめは君の心の自由を奪い、絶望で凝り固まらせようとする卑劣な行為だ。決して君にしか描けない君の将来の夢を断ち切ってはいけない。

(毎日新聞 10月31日2006年)

- (71) # 「職業」を表す英語の「ボケーション」の語源はラテン語の「呼び声」という。「コール(呼ぶ)」の進行形の「コーリング」も職業を表す。つまり人は神様からの呼び声に応じて職業につくのだ。それは授けられた使命や天職という意味合いが強かった。自分の仕事を天職とし、それに励む生き方は日本でも大切にされてきた。仕事を神や天から授けられた使命とみなすことで、人はよりよく生きることができる。たとえば「子供を守る」仕事はどうだろう。いかにも神様が人に授けそうな使命である。(中略)子供を何とか守ろうと地域は取り組んでいたのだ。「家に帰りたくない」という拓夢ちゃんの泣き声も児童相談所に届いていたはずだ。そのいきさつについて児童相談所の責任者は、担当者と住民との間で「温度差があった」と語る。まるで人ごとだ。ほとんど親から与えられる苦しみしか知らなかった3年余の生に「夢を拓く」という名があまりに悲しい。同じ境遇に置かれた多くの子供のため、全国の児童相談所員はその使命を呼びかける声に

耳をすまし、しっかりと心に刻んでほしい。

(毎日新聞 10月25日2006年)

トピックの生起位置について考えてみた場合、談話全体のトピックは、談話の初め、中ごろ、終わりのうち、談話の冒頭部分に設定されるのが自然であると考えられる。しかしながら、談話の冒頭部分は、先行文脈が存在しないため、通常、聞き手の知識に依存する形での情報提示が困難である。本節では、伝聞表現が談話の冒頭部分に現れ、談話全体のトピックを導入している例を見てきたが、伝聞表現は、情報の出所が話し手でも聞き手でもないことを明示する言語形式である。伝聞表現を用いることで、話し手は、聞き手の知識状態に依存することなしに情報を提示することが可能になるわけである。先行文脈が存在せず、通常、聞き手の知識に依存することが出来ない談話の冒頭部分であっても、伝聞表現を用いて談話主題を提示することは可能である。

英語の伝聞表現については、これまでのところ、筆者は同表現が談話の冒頭部分に現れた例を見つけられないでいる。英語の伝聞表現の談話における生起位置と同要素が日本語の伝聞表現と類似のトピック導入機能を果たしうるか否かについては、今後さらに詳細な観察を行う必要がある。

4 . おわりに

本稿では、日本語と英語の伝聞表現を構文レベルおよび談話レベルで比較した。構文レベルで両言語の伝聞表現を比較したところ、日本語の伝聞表現が感嘆表現との共起が可能であるのに対して、対応する英語の伝聞表現ではそれが許されないことが明らかとなった。

談話レベルで両言語の伝聞表現の振る舞いを観察したところ、日本語の伝聞表現は、談話の冒頭部分に現れ、談話全体のトピックとして機能しう

ることが分かった。英語の伝聞表現については、同要素が談話の冒頭部分に現れうるか否かが検証出来ていない。英語の伝聞表現に日本語の伝聞表現と同様のトピック導入機能が認められるかどうかを明らかにすることが今後の課題として残されている。

参考文献

- Givon, T. et al.eds. 1983 “Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study” John Benjamins
- 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法 改訂版』 くろしお出版
- 益岡隆志 2000 『日本語文法の諸相』 くろしお出版
- 森本順子 1994 『話し手の主観を表す副詞について』 くろしお出版
- 仁田義雄・益岡隆志編 1989 『日本語のモダリティ』 くろしお出版
- 仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 仁田義雄編 1995 『複文の研究(下)』 くろしお出版
- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版